

松江市 報道機関配布資料

令和8年3月27日

件名 松江歴史館スポット展示「徳川家康からもらった木椀—家老朝日家の家宝—」の開催

内容 それぞれの家にはその家の由緒となるものを「家宝」として受け継いでいました。この度紹介する資料は、松江藩の家老を務めた朝日家に「家宝」として伝来した木のお椀です。この木椀は徳川家康と朝日家との関係や朝日家の「朝日」という苗字のルーツを伝えるものになります。

1570年ごろ徳川家康が武田家と戦った際、松江藩家老となる朝日家初代の袴田千助は敵方に忍び寄り、敵将の西郷伊予を鉄砲で討ち取ったのです。そのことを朝食中の徳川家康に報告したところ、家康は大いに喜び、ちょうど朝日が差す時分であったため「朝日」の苗字と手にしていた木椀を褒美として与えたと伝わります。木椀にはご飯粒が残っていたのでしょう。朝日家では木椀とともにご飯粒も拝領物として保管し、松江藩の藩主が見たという記録もあります。

本展では近年朝日家から寄贈を受けた徳川家康から拝領した木椀を初公開します。

会期 令和8年(2026)3月31日(火)～6月28日(日) 開館時間:9:00～17:00
休館日:毎週月曜日(祝祭日の場合は翌平日)

場所 松江歴史館 基本展示室最終コーナー

料金 基本展示観覧料が必要

注目点 松江歴史館では近年寄贈・寄託された資料等をミニ展示やスポット展示で紹介しています。この度展示する朝日家の木椀は初公開になります。

【問い合わせ】

文化スポーツ部 松江歴史館 担当:新庄 電話:0852-55-5511

徳川家康からもらった木椀

— 家老朝日家の家宝 —

それぞれの家にはその家の由緒となるものを「家宝」として受け継いでいました。この度紹介する資料は、松江藩の家老を務めた朝日家あさひに「家宝」として伝来した木のお椀です。この木椀は徳川家康とくがわいえやすと朝日家との関係や朝日家の「朝日」という苗字みょうじのルーツを伝えるものになります。

1570年ごろ徳川家康が武田家と戦った際、松江藩家老となる朝日家初代の袴田はかまだ千助せんすけは敵方に忍び寄り、敵将の西郷伊予さいごういよを鉄砲で討ち取ったのです。そのことを朝食中の徳川家康に報告したところ、家康は大いに喜び、ちょうど朝日が差す時分であったため「朝日」の苗字と手にしていた木椀を褒美ほうびとして与えたと伝わります。木椀にはご飯粒はんつぶが残っていたのでしょうか。朝日家では木椀とともにご飯粒も拝領物として保管し、松江藩の藩主が見たという記録もあります。

本展では近年朝日家から寄贈を受けた徳川家康から拝領した木椀を初公開します。



木椀と穀類等の入ったガラス瓶

松江歴史館蔵（朝日家旧蔵）



食べ残しごと徳川家康から拝領した木椀

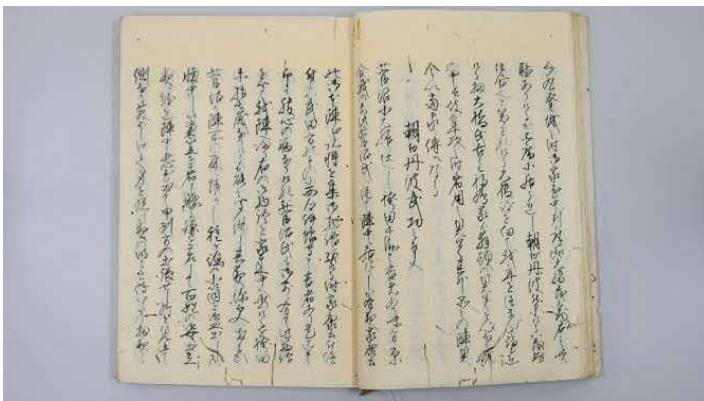
朝食中の徳川家康は、戦功を挙げ報告に来た袴田千助（後の朝日丹波）に手にしていた木椀に汁をかけ、褒美として与えたという。

高台の高さや厚みから 16 世紀後半の木椀と特徴が合致し、松江歴史館の地下から出土した木椀(1600 年代初頭のもの)と酷似しており、時代の齟齬はない。



穀類と布製品が入ったガラス瓶

ガラス瓶に入った穀類は、木椀にあったご飯を集めて保存したものであろう。もう一つのガラス瓶は、木椀を梱包していた布製品をまとめて収めたものと考えられる。ともに経年のため劣化している。朝日家では家の由緒を伝える家宝として、大切に保管していた。



松江で知られた朝日家の武功

『雲陽秘実記』は松江藩に関わる伝説や伝承を記録した書籍で、朝日家の木椀について記した「朝日丹波武功之事」を収載している。松江の人々にも知られた木椀だったのであろう。

雲陽秘実記（館蔵）

朝日丹波の武功

菅沼小大膳に仕えていた侍に袴田千助という若者がいた。三方原合戦の時、菅沼氏に従ってその陣中にいた。ある夜、家康はその本陣への諸將を集め、いろいろ物語りをしてきたが、その時、「武田の侍に西郷伊豫守という豪者がいる。これが自分にとっては頭痛の種だ。誰かこれを討ち取る者があれば恩賞は望みに任せよう。」と言った。御前に侍っていた菅沼もこの話を聞いたので、わが陣屋へ帰ると家中の者にこの事を話した。袴田千助は当時十七歳であったが、「武功をたてる絶好の機会」と、その夜ふけ、菅沼の陣所に床に飾ってあった種ヶ島の小筒を一挺盗み出し、これを懐に入れてと蓑笠をつけ、腰に鎌をさして百姓の姿になり、夜に紛れて陣所を忍び出た。甲州勢が出張りしている所まで来ると、傍にあった藪の中へ身を隠し、夜の明けるのを待っていた。やがて空が白んで来ると、甲州方の物頭西郷伊豫守は、馬に乗り先頭に立って、何人かの部下を率れ、備立の場所を見立てようと、いろいろ指図をしていた。藪に隠れ待ち設けていた千助は、よくよく狙いを定め、かの種ヶ島の小筒をうち放すと、弾はあやまたず西郷の胸板を打ち貫いた。一声叫んでまっ逆様の馬から落ちる所を、藪中から躍り出た千助は、腰なる鎌を抜き、かの伊豫守の首を切って落した。雷光石火の早業であった。首実驗した家康は大いに喜び、千助を近くに召すと、「さてさて汝は鷹の逸物である。」と言ってほめた。折しも東の山から朝日が差しのぼって来たので、「姓は朝日、名は千助」と命名し、直参の中に組み入れた。千助が家康の御前に来た時、家康は朝食の最中であって、椀の汁を飯にかけ手づから千助へ賜った。その御膳椀はかの種ヶ島銃と共に朝日家の家宝として永く後代へ伝えられた。

『雲藩遺聞』（妹尾豊三郎編著）より